

八、願生彼国

他力

まことに、衆生往生成仏についての因果、果上還相摂化の活動の一切は、悉く皆、如来の至心に回向したまえるものであり、しかして之を念仏生活の上に真証したもうたのが、即ち我が聖人であった。他力とは如来の本願力これである。しかるに世の多くの、いわゆるお同行たちは、他力を無力と間違えて、その功利的欲念にものを言わせ、自力の未だ破れざるに、手を使わず、足を運ばず、ただ「その身そのまま」の語を記憶して、何ものをも獲得せざる、煩惱的生存のままを放置し、行なく信なく、決定なく相續なし、ただ、病的感情の一时的陶醉の味をくり返しつつ、尊き聖語は、ほとんどその浅ましき現実生活の言いわけに使って、ついにそこに無生命、無力、無道義なる浄土偽宗を暴露するに至ったのである。

他力とは、無力に非ずして、永遠に他力である。大無量寿経を聞信する者は、必ずその意業に信心決定し、憶念し相續する。その身業に礼拝し、その口業に称名讃嘆する。即ちその全我を挙げ、一生を通じて仏道に精進し、念仏に生きる。しかしてかかる三業全我を挙げて仏道に生きるままが、如来本願力の至心に回向したまえるものである。まことに如来本願は、衆生の自覚、その念仏行を通して、尊き本願を人生に実現したまうのである。すでに如来本願力の回向であり、久遠の故郷からの招喚の勅命である。行者は必然にその自然の御計らいのままに行歩するのである。そこに願往生の生活が生まれる。

願

信心歓喜は、其の名号を聞くことによつて、衆生の上に成就する世界であつた。しかして既に、信樂釈において領解したるが如く、信樂とは何ものをも加える必要なき、満足の信心一海であるが故に、明日に問題を残さず、徹信徹証、一念に、衷心の志願を満足して余すことなき世界である。

しかるに「信」とは、「これはペンであることを信ずる」と言うが如き、ただの信ではなくて、信は生きたる生命そのものなるが故に、信の内面には澆刺たる力があつて動くのである。善導大師は信心を説いて、

「衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生の心を生ぜしむ。」

と言われた。まことに信心とは、固定化されたる心的状態ではなくて、満たされたる心の内奥より必然に動く力そのものである。しかしてかかる力の動きを「願」と言われるのである。信は願を孕むのである。欲は満たされざる幻を追うて動き、願は満たされたる信樂の中より生れる。

欲と願

衆生は三毒の煩惱のみの持ち主である。であるからその生活の一切は、貪欲を以て生命とし、貪欲のみによつて動いて流転せるものである。しかるに、その三毒煩惱中に信心を發起すれば、信心は如来回向の清淨真実であり、涅槃とその本質を同一ならしめる仏性であるが故に、念仏行者は、内に三毒を自証し発見しつつ、しかも大信心に生かされるものである。信は清淨なる願往生心であるが故に、念仏の行者は、貪愛瞋憎あるがままに貪愛瞋憎を超えて、願往生に生きる。欲を超えて願に生きるのである。

人はその飽くことなき貪婪、慳貪邪見を生命としつつ、しかも念仏の行者たることは出来ない。「邪見憍慢惡衆生、信樂を受持すること甚だ以て難し。難中の難、斯れに過ぎたるはな

し。」とは聖人の嚴戒であつた。衆生は悉く、邪見憍慢の惡衆生ではある。しかし、眞の邪見憍慢は邪見憍慢を知らない。大地に合掌して、念仏に救われるものは、必ず邪見憍慢を知り、それ故に機を深信して合掌帰命するのである。しかして邪見憍慢とは、己の五欲貪欲を無理非道におし通さんとするに外ならない。されば、念仏の境において願に生きるか、欲に生きるか、我等には二つの世界より外に生すべき世界はあり得ない。

願生彼国

「願生彼国」とは、まことに信の内面に動く願を現わされたものである。故に天親菩薩は、「世尊、我、一心に盡十方無碍光如来に帰命し、安樂国に生まれんと願いたてまつる。」と告白せられた。願生安樂国とは、菩薩の念仏生活の全てでなければならぬ。

今、世尊は願生彼国と教えたまい、菩薩はこれに応えて願生安樂国と宣べたもうたのである。我等の現実は迷妄深き生死界であり、安樂国は三界を超絶したる理想の彼岸である。生死海にありつつ本願力に乗托して理想の彼岸に往生せんとする意志、即ち願生心でなければならぬ。信心の行者は必ず彼岸に願生する。

彼岸への願生、これ念仏行者の具体的な生活である。しかるに世の多くの同行は、彼岸への願生を極樂への地理的移動と考える。あるいは又単なる時間的推移ととり、物質的運搬と考える。しかし彼岸への願生は決して地理的移動ではない。地理的移動は外への世界、相對差別の世界であつて、出世間道ではない。又単なる時間の移り変わりによつて得られるのではない。ましてや、肉体の物的移動では断じてない。願生安樂国とは、如来の本願に生かされる、念々、歩一步の白道上の生活のことである。如来の招喚による、内へ内への歩みである。

彼岸への願生と言ひ、願生安樂国と言ひ、願生彼国と聞けば、淨土は唯、彼方に地理的に固定し、それに向つて、旅行者があるいは乗物によつて至るが如く、移動するのだと考える。

しかし淨土は決して彼岸に固定化された国土ではなくて、その三嚴二十九種の莊嚴は、いわゆる願心莊嚴の淨土なるが故に、其の全ては皆衆生の現実に交渉を持ち、一々の莊嚴には第十八願の願意を持つ。されば三種莊嚴の全ては南無阿彌陀仏の内容に外ならない。

淨土へ願生するのではある。しかし、淨土を挙げて衆生を招喚するとは、淨土は彼岸より衆生の現実の上に働きかけ、淨土が人生に来るのである。彼岸こそ此岸に、淨土こそ穢国に、光こそ暗に、如来こそ衆生に呼びかけ、働きかけて、我等を動かし、我等を覚まし、その本願力を却つて彼岸への道路たらしめて、衆生を彼岸へと往生せしめるのである。されば、彼岸への願生心を発さしめたるものも亦、彼岸である。されば、彼岸の淨土は、行者の願心に食ひ入つて、豊らかなる願生心の内容となり、その念々の食となつて彼岸を人生に実現するのである。されば、淨土は、我等の現実を超絶せる永遠の彼岸でありつつ、眞に彼岸に願生する者は、生死に随順しつつ、今、現に淨土に遊び得るのである。これ善導大師が、『般舟讚』に、「厭えば則ち娑婆永く隔つ、忻えば則ち淨土に常に居せり。」

と言われ、これを受けて、聖人は、

「光明寺の和尚の般舟讚には、『信心の人はその心すでに常に淨土に居す』と釈したまへり。『居す』といふは『淨土に信心の人の心つねにゐたり』といふ意なり。」

と釈せられたのである。されば淨土とは、星の彼方等に架空的に仮想されたる幻想ではなくて、信の内容であり、信の觀る純粹客觀の世界であり、人生生活の指導原理であり、正しき念仏生活の背景であり、理想であり、価値であり、眞實在である。

浄土と願

ここに於いて我等は世尊の「願生彼国」との教命に対して深き感銘を受けるのである。

まことに人生の現実には浄土ではない。浄土は彼岸であつて人生ではない。浄土は永く輪廻顛倒を離れたる理想の涅槃界であり、人生は永遠に苦悩の生死海である。理想と現実、彼岸と此岸、二者がいよいよ二であればあるだけ、二にして一という内的交渉を有たしめるものは、如来の本願であつた。如来の本願は、彼岸より現実生死に向つて、暗底深くはたらきかけて、いよいよ彼岸と人生との相即一なる交渉を有たしめたまうに、今更に、行者の願生心は、立場を一転して、行者の願往生心によつて、彼岸と現実と相即一致せしめて、彼岸の意味を現実にあらしめるのである。行者の願往生心なくて、何処に浄土の意味があろう。彼岸の莊嚴功德も、行者の念仏の世界、その願往生の自覚を通さずば、その本願を人生に実現したまうことは不可能なのである。しかれども、行者の願生心も亦、挙げて如来本願の回向顕現に外ならないのであつた。

菩提心

願生彼国と言われる限り、我をして彼岸の世界、清浄なる国土にあらんとする願いが、即ち願生浄土である。浄土は如来の国である。如来の正覚、即ち正報にともなう依報である。その国土の尊さも、その眷属たる無量の大菩薩も、全て国土の徳に外ならず。しかもそのまが、如来正覚の徳に外ならない。依報(境遇)は、正報(その人自身)より生れる。衆生は、それ自体罪惡に満ちたものであり、煩惱成就せるものであり、それ故にその依報も亦、無限の生死海である。生死の苦海こそは、衆生の国である。

しかるに念仏行者は浄土に願生する。浄土に願生するが故に、生死を後にするものではない。しかれども生死海より浄土に願生するとは、人生を逃避して、浄土に己一人の樂を求めんとするものではない。もしそうであるならば、願ではなく貪欲の一変形にすぎない。されば、曇鸞大師は、

「若し人、無上菩提心を発せずして、但彼の国土の受樂、間無きを聞きて、樂の爲の故に生ぜん」と願ぜん。亦当に往生を得ざるべきなり。是の故に、言は『自身住持之樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲うが故に』と。」

と仰せられた。彼岸に願生する者は、自身の樂を求める心がその根底であつてはならない。眞実の願生心は、必ず十方衆生を大悲心に抱きたまう如来の本願より回向せられたものであるが故に、その願生心はそのまま浄土の菩提心に外ならない。

まことに願生の行者こそは、大悲の御心を領解し、その本願に生かされるものである。それ故に、一切衆生を代表し、荷負して、聖聚のいます彼岸に旅立たんとする。往相の生活とは彼岸への生活である。彼岸への往相、願生の心に生きることが、そのまま至心に回向したまえる如来の本願の尊さを生死海に光あらしめることとなるのである。一切の草木は太陽に招喚されて、上へ上へと延びるが如く、一切衆生は、理想の浄土に招喚されて、貪瞋二河を超越て、念仏に乗托して願往生の一道に生きるのである。

念仏の行着は必ず浄土に願生する。浄土への願生なき念仏は眞の念仏ではあり得ないのである。曇鸞大師は、天親論主の「世尊我一心」とのたまえるを解釈して、

「我一心とは、天親菩薩の自督の詞なり。言うところは、無碍光如来を念じて、安樂に生ぜんと願ず。心心相續して他相間雜なし。」

と言われた。この釈の意をうかがうに、一心とは念無碍光如来の相である。無碍光如来を念ずる一念の信心、その「念」即ち歸命は、何故になされるのであるか。この「念」の意を現わ

せは、即ち「願生安楽国」である。即ち「無碍光如来を念ずる」は、病氣平癒等の現世祈禱のために非ず、定散二善を求むる修養の爲にも非ず、その他、一切の個人的幸福を求める貪欲の爲ではなくて、まことに願生安楽国のためである。これ、安楽国に願生する行者の心意が、即ち念無碍光如来の一心である。されば、願生安楽国せざる念仏は眞の念仏ではない。随つて願生安楽国する者は必ず如来を念じ、弥陀を念ずるものは必ず安楽国に願生するのである。理想の彼岸へ、一心は直ちに行歩するのである。「無碍光如来を念じて、安楽国に生ぜんと願ず。心心相續して他想間雜することなし。」前心、後心、同一心心相續するは、一念一念、歩歩白道を浄土に願生するが故である。

しかるに曇鸞は、

「若し人、無上菩提心を発せずして、但彼の国土の樂を受くること間なきを聞きて、樂の爲の故に生ぜんと願ぜん。亦當に往生を得ざるべきなり。」

と願生の心の不純を戒められた。欲心は樂を求め、個人的幸福を求める。その享樂の爲に浄土に往生しようとする。地上に満たされざる幸福を浄土に於いて求めることは、貪欲の不純によるのである。かるが故に、特にこの願生心の清浄純粹を示して「一心」と言われるのである。

眞実の願生心は貪欲に根ざしたのではない。一心は直ちに如来本願そのままの、清浄眞実なる赤きまごころである。随つて自身の樂を求める心ではない。如来の大慈悲そのままの一心である。この一心こそは、仏心の回向なるが故に無上菩提心と言われるのである。

願作仏心

願生心は浄土を対象とする心であるが、更にこの願生心を、願作仏心とおきかえてみれば、願の何たるかが一層明瞭となるであろう。

けだし、信心は「信心よろこぶその人を、如来とひとしと説きたまう、大信心は仏性なり、仏性すなわち如来なり。」(和讃)とあるが如く、同一仏性を、因位にあつては信心と謂い、果位に於ては如来と言われるのである。されば、信心の行者はやがて成仏する。しかしてかかる信心のひとは必ず念仏する。念仏とは、八万四千の雜行を超えたる大行である。信心の人はこの名号の大行に乗托するのである。この念仏行によるが故に、六道を超えて、浄土に往生するのである。邪行悪行はもろんのこと、自力の八万四千の雜行によれば、衆生は輪廻して往生することは出来ない。唯一絶対の浄土の行に乗托するが故に、浄土に往生するのである。名号はまことに所乗の大船である。されば念仏の人は往生する。

しかれども、以上の信心による成仏と、念仏行による往生とは、根本的に二つではない。何故ならば、信心とは、名号への開眼であるが故に、弘誓の大船を弘誓の大船と信知する心なるが故である。又更に名号とは本願の表現であり、本願とは、名号に内在する豊らかなる内容であり、意味である。本願を領解すれば信心であり、名号を全領すれば念仏である。本願や名号、名号や本願、名号を離れたる本願もなく、本願を離れたる名号もない。されば信心を離れたる念仏もなく、念仏を具せざる信心もない。かるが故に、信心に即して言えば願作仏心であり、念仏について言えば願生浄土である。いづれも、一心において動く生命に外ならない。

無上菩提心

曇鸞大師は「菩薩の巧方便回向成就」を説くに當つて、大經の上輩、中輩、下輩の三輩往生について説かれた經文を解釈しつつ、次の如く明かされた。

「三輩生の中に、行に優劣有りと雖も、皆無上菩提之心を發さざるは莫し。此の無上菩提心は即ち是れ願作仏心なり、願作仏心は即ち是れ度衆生心なり。度衆生心は即ち是れ衆生を撰取して有仏の国土に生ぜしめる心なり。是の故に彼の安樂淨土に生ぜん願ずる者は、要ず無上菩提心を發するなり。若し人、無上菩提心を發せずして……」

と言われた。この意によれば、無上菩提心は願作仏心である。願作仏心とは度衆生心である。憶うに、願作仏心とは、我自身が助からんとする切実なる願心である。如何なる尊き心情も、必ず先ず一人において發されねばならない。信心の人は、若木の伸びるが如く、自ら助からんとする一心、即ち願作仏心をおこすのである。しかるに、この一人が真に助からんとすることに、若し意味があるならば、その一人が助かりたい心が、そのまま一切衆生を助きたい心なるが故である。一切衆生を助けたいとの大悲が、個においては、自ら助かりたい心となるのでなければならぬ。しかして、自ら助かりたい心が願作仏心であるならば、一切衆生を助けたい心が度衆生心である。

聖人は、過去の誰よりも、自ら助かる道を生きた方であつた。しかるにその一心が、遠く七百年、よく、億々の衆生を啓蒙し教化して救い得たのは、その願作仏心が、そのまま度衆生心であつたが故である。

けれども、度衆生心が尊ばれるからとて、他の衆生を救わんとして、様々なる策を弄して、美音巧言、如何に努力するとも、その人の願作仏心にして、朦朧として、有るか無しかであるならば、彼はすでに生命を失える二乗である。世には、何等の進展なく、精進なく、成長なき独覚の人の多いことである。すでに生命の第一義諦を、過去の問題として押しやり、卒業生となり終つて、それよりは、浅間しくも、他人の信仰の世話係として、化石した自己を憍慢心によつて振り回して、底なき己の痴おろかさと、底なき如来とを忘れて、生きるに至るのである。されば、熾烈なる願作仏心こそ、必ず成就され一貫されなくてはならない。願作仏心あるが故に、心心相續して、不断に大法を撰取して食となし、一道を明らかに生々として生きぬくのである。

しかるに、度衆生心とは、一切衆生を濟度せんとする心なるが故に、衆生の貪欲ではない。即ち如来の大悲心こそ、一切衆生を濟度せんとする心である。この如来心において外に、何処にか度衆生心があるう。この如来の度衆生心こそ衆生を救いきつて願作仏心を生ぜしめたのであり、それ故に衆生の發起する願作仏心は、如来の度衆生心と、その本質を同じうするのである。されば願作仏心は度衆生心であるが故に、己一人助かろうとせずして、一切衆生と共に助けられんとするのである。

「度衆生心即ち是れ衆生を撰取して有仏の国土に生ぜしむる心なり。是の故に彼の安樂淨土に生ぜん願ずる者は、要ず、無上菩提心を發するなり。」と説かれるのである。

天親論主は「普く諸の衆生と共に、安樂國に往生せしめたまえ」と告げたまひ、善導大師は「願はくは、此の功德を以て、平等に一切に施し、同じく菩提心を發して安樂國に往生せん」と願じたまいし所以も知るべきである。これ皆、聖者の度衆生心に他ならない。

ここにおいて、無上菩提心とは、赤き真実そのものであることが知られる。自ら成仏せんとする一心の願求あり、そのままに一切衆生を度せんとする心であり、自身の樂を求めず、限りなく自利利他一如の本願に生かされんとする心である。願作仏心であり、度衆生心であるが故に、無上菩提心と言われるのである。

願生彼國

聖人は、信巻本において、

「横超は、斯れ乃ち願力回向之信樂、是れを願作仏心と曰う。願作仏心は即ち是、横の大菩提心なり。是を横超の金剛心と名づくるなり。」

と宣べられた。これによれば、願作仏心とは信樂の異名に外ならない。横、即ち他力回向の信心である。横超の金剛心である。されば、願作仏心は、聞信の端的に、入信する一念に外ならない。しかもそれが如来回向の清浄心なるが故に、無上菩提心と言われるのである。

願生彼国を説かんとする私は、はからずも、願作仏心について語りすぎた。願作仏心の願も、願生安樂国の願も、異った二つのものではない。願は欲を超えたる心である。自身の樂を求めざる心である。信の内面に動く自然の力である。然れば二者の間には、何等の差はないのであろうか。

願作仏心は、信樂そのものであり、願生心は、その相統の相である。すでに曇鸞大師が、

「無碍光如来を念じて、安樂に生ぜんと願ず。心心相統して、他相間雜なし。」

と仰せられたるが如く、願生安樂は、念仏の意であり、真心、真心、念念に相統するが故に、願生安樂は果逐されるのである。憶うに浄土真宗に於いて、特に浄土往生を説くは、聖道門と簡ぶ重要な眼目でなくてはならない。苦惱に満てる生死界より、大樂成就の涅槃界たる浄土に往生することこそ、救いと自覚との完成せられる所以である。

しかしてそれは、真実人生という所が、即身に開覚しきれざる制約ある所たるを知る者の必然の道である。純粹客觀の世界たる浄土に願生する者は、現前に内に真実道を、歩一歩、行歩するものであって、亦如来の願意に相応し随順するものである。「至心、信樂、欲生我国」と誓いたまうは如来である。聖人は、欲生を以て、如来諸有の群生を招喚したまうの勅命とせられた。その召喚の勅命によつて、金剛の真心は決定するのであるが、勅命はすでに「我国に生れんと欲え」との勅命である。信心決定の行者、あに願生せざるべけんや。彼岸に招喚したまう勅命によつて、一貫相統の行歩を展開する、是れ即ち願生安樂国である。念仏行者は必ず願生する。